

【結論及び考察】(1) AAEの有無は機能予後を左右する。(2) 完全閉塞例でも thrombolysis を組み合わせることにより therapeutic time window を延長させられる例が存在する。(3) Completed stroke でも CEA の適応となる例が存在し、その適応決定に DWI が有効である。

3) クモ膜下出血術後の遅発性脳血管攣縮に対する塩酸ファスジル(エリル®)の使用経験

市川 昭道・川崎 浩一(更埴中央病院 脳神経外科)
 藤本 剛士
 青木 悟・斎藤 隆史(長野赤十字病院 脳神経外科)

クリッピング術を行った急性期破裂脳動脈瘤に対して、遅発性脳血管攣縮に対する塩酸ファスジル(エリル®, 以下 FH と略す)の予防効果を検討した。対象は、1992年4月以降の同一術者による FH を使用しない22例(non-FH 群)と、1995年10月以降の FH を使用した19例(FH 群)の計41例で、後者に女性が多いという以外は、両群間で年齢・CT 上の Fisher group・術前の Hunt & Kosnik 分類には差がなかった。FH はクリッピング術を施行(Day 1 or 2)した翌日より開始し、14日間使用。また全例に14日間以上の持続脳槽ドレナージを併用した。[結果]①CT 上の低吸収域の出現は、non-FH 群:13/22例, FH 群:4/19例で有意($p < 0.03$)に FH 群で低く、②症候性血管攣縮の出現は、non-FH 群:12/22例, FH 群:1/19例で有意($p < 0.002$)に FH 群で低く、③退院時 ADL も、Excellent + Good は non-FH 群で9/22例, FH 群で15/19例と有意($p < 0.03$)に FH 群が優れていた。④FH 使用群で術後の予期せぬ出血は一例も無かった。[まとめ]くも膜下出血後の遅発性脳血管攣縮の予防という面からは、FH は有効な薬剤と考えられた。今後症例を重ね検討していきたい。

4) 広範な焦点を有する前頭葉てんかんの2手術例

富川 勝・福多 真史(国立療養所西新潟中 央病院 脳神経外科)
 亀山 茂樹

一側大脳半球の広範な脳実質障害を伴った前頭葉てんかんの2手術例を報告する。症例1, 48歳女性。生後9ヶ月で脳炎に罹患し精神発達遅滞と右片麻痺が後遺した。

12歳でてんかん初発。発作は薬物療法に抵抗性を示し、単純部分発作が5-10/日、複雑部分発作が2-5/日の頻度で出現していた。MRI では左大脳半球の広範な実質障害が認められた。発作間欠時脳波では左半球優位に棘波が認められたが、発作時脳波ビデオ記録では焦点は同定できなかった。発作間欠時 SPECT では左大脳半球の広範で高度の血流低下が、発作時 SPECT では右小脳半球の著明な血流増加が認められた。発作症候と以上の所見より左前頭葉てんかと診断し、慢性硬膜下記録を行い焦点を同定し、functional mapping を行つて、焦点切除術(前頭葉部分切除、皮質切除)を施行した。術後神経学的に悪化なく、発作は消失している。症例2, 25歳女性。1歳時に急性硬膜下血腫で手術を受け、精神発達遅滞と右片麻痺が後遺した。3歳でてんかん初発。抗てんかん薬で一時発作は抑制されたが再び増加し、複雑部分発作が4-5/日の頻度で出現するようになった。発作間欠時脳波では F3, C3, F7 に棘波が認められたが、発作時脳波では症例1と同様に焦点は同定できなかった。MRI, 発作間欠時・発作時 SPECT は症例1とほぼ同様の所見であり、慢性硬膜下記録により焦点を同定し、焦点切除術を行つて良好な結果を得た。以上のような広範な脳実質障害に起因する前頭葉てんかん症例に対しても、慢性硬膜下記録と functional mapping を用いた焦点切除術が有効な手術戦略となると考えられた。

5) 低体温療法における免疫能の検討

斎藤 隆史・倉島 昭彦(長野赤十字病院 脳神経外科)
 渡部 正俊・青木 悟
 大塚 顕(小川赤十字病院)
 原田 敦子(新潟大学 脳神経外科)

低体温療法において、感染症の合併は予後に影響を与える重要な因子である。当科で行ったバルビタール単独群、低体温併用群の感染症合併率は、それぞれ26%、40%と低体温併用群で高く、敗血症などの重症感染症が多かった。今回各種免疫能に及ぼす体温の影響を検討したので報告する。【対象と方法】低体温療法を行った12症例で、低体温中の患者末梢血中の白血球数、リンパ球数ならびに CD3, CD4, CD8, CD16, HLA-DQ の各種リンパ球サブセットを測定した。またリンパ球幼若化反応を、PHA, Con-A 刺激にて³H-TdR を用い、5% CO₂ 37℃ 8時間培養下で行った。NK 活性は5% CO₂ 37℃ 3.5時間培養による⁵¹Cr 遊離法に行つた。以上の結果と、体温との関係ならびに経時的变化を